

神大在職当時の思い出

大 西 克 也

もうすぐ還暦を迎えようとする私にとって、神奈川大学中国語学科は、30年に亘る教員生活の最初の5年間をお世話になった思い出深い職場である。赴任したのは1990年4月、中国留学から帰国したばかりの28歳の春であった。当時はバブル経済の最末期で、折からの中国語学習ブームに乗って各地の大学に中国語学科が増設されたことにより、就職状況は非常に良かった。ある先輩などは研究室の助手に採用された時、一年で辞めて他大学に行かないでくださいと言われたと聞く。今からはとても考えられない世の中だった。

神大に就職する話は、北京大学留学中に恩師の平山久雄先生から頂いた。1989年に赴任された学科創設メンバーの佐藤進先生が、わずか1年で母校の東京都立大学に戻られることになり、間を置かず後任の採用が必要になったという事情もあったようである。当時私は留学2年目で、1989年6月4日未明に発生した天安門事件のため中断した留学期間をさらに短縮するのはやや残念ではあったが、先生が信頼できる就職先として勧めてくださるお話を謹んでお受けするのが自然のように思われた。こう言うとか何か他人事のようなのだが、振り返ると人生の節目節目に出会うある種の命運に乗って流されて来たような気がしてならない。

就職に当たっては尾上兼英先生に大変お世話になった。ご迷惑をおかけしたと言ったほうが適切かもしれない。業績も少なく教育経験もなく、海

のものとも山のものとも知れない若輩者を採用するのである。学科の説得から始まり、教授会での人事報告、文部省への書類等、当時頂いたお手紙を読み返してみるとご苦労のほどが偲ばれ、とても申し訳ない気持ちになる。平山先生は未熟な私の身柄を尾上先生に預けられたのだと思う。初年次の勤務条件は週3コマだった。当時としてもあり得ない優遇だが、要するに最初の1年間は見習い期間、引き続き東大に通って勉強なさいという、実質上の条件付き採用である。就職後も2年ほど東洋文化研究所の松丸道雄先生のゼミに通い、西周金文の勉強を続けられたのは本当にありがたかった。

1年目の担当は中国語2コマと文献講読の専門授業1コマだった。文献講読は趙元任の「我的語言自伝」を選んだ。留学中に入手した『趙元任語言學論文選』（中国社会科学出版社、1985年）附載の簡体字版である。古典から地方の言語文化、世界の言語に至るまで、ユーモアに富んだ語り口で縦横無尽に語られる言葉にまつわる人生譚には飽きることがない。きちんと読むには骨が折れるが得られるものも多い。対象は1期生の3年生で、これが神大での最初の授業だった。入念に準備をして初回に臨んだのだが、教室に入って学生を見たたん、胃がきりきりと痛み出した。予想もしなかった事態に狼狽した。忘れ物をしたと取り繕って一旦自室に戻り、呼吸を整えてから再び教室に戻って授業を開始した。初回が厄落としになったせいか、その後は授業で大きなトラブルに見舞われることはなかった。

2年目からは担当が5コマになり、ゼミや一般外国語の中国語も担当するようになった。ゼミでは清・顧張思が俗語の語源などを考証した『土風録』を読んだ。「老酒」「筷子」「竹夫人」など、語彙を一人ずつ割り当て、引用される文献に当たりながらレポートをしてもらった。現代口語の常用語の語源やそれにまつわる文化への関心とともに、現代語とは異なる文言の世界に触れてもらいたかったのである。しかし使ったテキストは標点の

ない影印本である。よくついてきてくれたものだと思う。ちなみに最初のゼミ生7名はすべて女子学生だった。内心どうしようかと困惑したが、覚悟を決めてゼミ終了後のコンパも行なった。お会計の時になって1万円札を出すと、何と自分たちが出すと言って聞かない。若い教員は給料も少なく生活が大変だと思っていたそうである。もちろんご馳走になるわけにはいかないで、それなりの負担はするのだが、ほのぼのとする思い出である。

中国語クラスでは私の評判はあまり芳しくなく、「悪魔」という綽名を頂戴した。原因は点数のつけかたにあったようである。大量に不可をつけたわけではない。むしろそんなことにならないよう、素点を加工する数式を考えて、それに忠実に点をつけていたら、79点とか、58点とか、微妙な点数が多くなったのである。学生からすれば、1、2点プラスしてランクを上げて欲しいと思うのが人情だろう。なお授業で学生を叱ったのは、記憶する限りでは5年間で1度だけである。中国語のクラスでテキストを暗唱させ、一人ずつテストをしたことがあったのだが、学生の視線がおかしいことに気がついた。ふと振り返ると、黒板にテキストが書いてある。犯人探しをする気さえ起きないほど腹が立ち、こんなクラスは教えないと宣言して自室に引き上げた。しばらくすると、どやどやと足音がしてドアがノックされる。学生が詫びを入れに来たのだった。黒板に答えを書くのはカンニング行為だが、今なら教えないのはアカデミックハラスメントと言われるかもしれない。昭和の教室の雰囲気が残る頃の思い出である。

私が赴任した時、中国語学科に専任教員として在籍されていたのは、那須清、尾上兼英、小島晋治、吉川良和、大里浩秋、山口建治、鈴木陽一（敬称略）の各先生だった。先生方は一回り以上年下の私に対して本当に温かく接してくださった。なかでも公私ともにもっともお世話になったのが、昨年12月に逝去された山口先生だった。ここからは当時に戻って山

口さんとお呼びすることをお許し願いたい。

私は赴任に先立ち、2月下旬に帰国したのだが、まず住居を決める必要があった。山口さんは自ら車を運転して住まい探しに付き合ってくださいだったのである。就職後も学生に間違えられるくらい頼りない私と、老成した風貌の山口さんの組み合わせである（当時40歳を過ぎたばかりだったと思う）。不動産屋では親子に間違えられることもあったが、神大の教員が付き添ってくださったためか、とても良い物件をすんなりと契約することができた。住むことになったのは緑区（現青葉区）のマンションだった。車で通勤されていた山口さんにとって通り道になる。帰宅の際にはよく車に同乗させていただき、やがて釣りにもご一緒するようになった。山口さんと私が釣りを始めたのは、小島先生の熱心なお誘いがあったからである。先生はわざわざ横浜の釣具屋にまで連れていってください、山口さんと私は先生のお勧めのタイ釣り用の釣竿を購入し、先生のお供をして海釣りにでかけるようになった。子供の頃から運動神経に恵まれず、実技系の苦手な私は、なかなか釣りの腕前も釣果も上がらなかったが、潮風に吹かれながら無心で過ごす半日は格別だった。お誘いのままにお供をさせていただいたが、ある時たまたま他大学での非常勤の日と重なっていた。残念ながらとお断りすると、小島先生は間髪入れずに「学生は逃げないけど魚は逃げちゃうよ」と仰る。これにはさすがに一言もなく、適当な理由をつけて休講にした。もう時効と言っていいだろう。せっかく手ほどきしていただいた海釣りだったが、1997年に鎌倉に転居してから一度も行っていない。車を持たない私は、山口さんに拾ってもらわないと、釣りに行く足がなかったのだ。

1993年の夏休みは、中央民俗学院での夏期研修の引率教員を務めたが、これも山口さんと一緒だった。8月下旬から9月にかけての3週間で、2週間の中国語研修とその後の旅行というのが当時のスケジュールだった。

天安門事件から4年後、高度経済成長を遂げる前の中国で、トラブルは起こるのが当たり前の時代である。金曜夕方の便で成田を立ち、民族学院到着は10時前。なぜか税関そのものがなく、入国はスムーズだった。学生は部屋割りの後入浴もできて、幸先の良いスタートだった。しかし月曜日には早速ボイラーが故障して、シャワーが使えない部屋が出た。2週目には水道管が故障して、水も使えなくなった。発熱や下痢で体調を崩す学生も続出して、山口さんと手分けして病院に連れて行った。自由旅行で北京に來た学生の中にも体調を崩した者がいて、その面倒も見た。学生には疲れと不満が蓄積したようだったが、こちらはそんなものだと思っているので、大して苦にはならなかった。民族学院の担当の先生方はトラブルにはとても丁寧に対応してくださり、病院の医師の方々も親切だった。何より注射針が使い捨てだったことに安心した。用心のために注射針を持参した留学生がいた時代である。

研修後の旅行は民族学院の手配で西安に行った。北京を午後1時半に出発して西安着は翌朝6時だった。留学中から広大な中国を長い時間をかけて走る列車の旅が大好きで、地図を見ながらここは漢代なら何々郡があったところだなどと考えていると飽きることがない。出発前に見学先のレクチャーを行った序に、時刻表を参考にして黄河を渡るのは21時50分頃だと予測したら見事に当たった。みんなで車内から暗い黄河を眺めたことを思い出す。西安では始皇帝陵、華清池、半坡遺跡、大雁塔、碑林、茂陵などお決まりのコースを見学した。少し変わったところでは、解放軍医院に連れていかれて気功治療なるものを見学したことだ。見学後に学生に高い薬を売りつけようとするので、大変不評だった。気功なのになぜ薬なのかよく分からないが、軍と商売とが結びついているのが中国らしく、これも良い経験だったのではないかと思う。西安から北京までは飛行機で戻り、一泊して無事帰国した。

さて話題は変わるが、中国語学科では創設十周年を記念して、『現代中国語学への視座』（東方書店、1998年3月）という論文集を刊行している。ここに私の論文はない。書けなかったのである。『論語』に「子所雅言、『詩』、『書』、執禮、皆雅言也」という一節がある。この「雅言」は当時の共通語、今で言えば「普通話」に当たるのというのが一般的な理解である。私はこれがどうしても腑に落ちなかった。論文集のお話を頂き、「雅言」をテーマに執筆構想を練り、資料も集めたのだが、電子コーパスが未整備の時代で、どこまで調べると書けるのか、完成の見込みが立たなかった。尾上先生にお詫びの手紙を差し上げ、執筆者から外してくださるようお願いした。「雅言」について一応の答えを出せたのは2014年のことである。「疑惑不解二十多年」の前置きとともに台湾で行った発表で、「雅言」を共通語とする解釈は、明末清初の共通語としての官話の普及等、当時の言語文化を孔子の時代に投射したものに過ぎず、春秋時代の言語に立脚点を持たないことを論じた。発表後友人に勧められてある雑誌に投稿したが、3年経っても音沙汰がない。問い合わせさせてみて査読で落とされていたことが分かった。届いた査読意見を読むと、「雅言」に関する常識を真っ向から否定した論旨が、審査委員の反感を買っていたように感じられた。不義理の罰が当たったのかもしれない。そこで研究室の紀要（電子ジャーナル）に書くことにして、『「雅言」 献疑』（doi/10.15083/00079011）という論文を2019年に発表した。二十年前の不始末を改めてお詫びするとともに、顛末のご報告とさせていただきたい。

最後になるが、この度退職を迎えられた鈴木さんとは、年が一番近かったこともあり、20号館4階の共同研究室でよくお話をさせていただいた。落研出身で博識な鈴木さんのお話を時折相槌を打ちながら伺うのは、無口で引っ込み思案な私にとってはむしろ快適だったのだ。よくバブル経済を、自分の足を食うタコに喩えて崩壊を預言されていたが、本当にそうなって

しまって、慧眼に感服したことを覚えている。離任後しばらく続けた非常勤講師を辞めてからはお目にかかることも少なくなったが、2011年12月に講演で訪れた台湾・成功大学で、鈴木さんも滞在中だと伺った。何と中国語で落語を一席口演された由。台南駅近くのシャングリラ・ホテルのロビーでコーヒーをご一緒しながら久闊を叙したが、それももう10年前のことになる。「初期の中国語学科の教員としての回想を」という鈴木さんからの言伝に甘えて、あまりご本人とは関わりのない話をとりとめなく書き連ねたことは申し訳なく、失礼をお詫び申し上げたい。

5年という短い在職であったが、振り返ると本当に濃密で恵まれたスタート期間だった。鈴木さんをはじめ、当時御一緒させていただいた先生方に、改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。